2024年6月9日

説教題「あなたの若い日に」コヘレトの言葉 12 章 1 節　あけぼの幼稚園創立感謝

主任牧師　加藤　誠

「あなたの若い日に、あなたの造り主を覚えよ。」（口語訳:伝道の書12章1節）

大井バプテスト教会附属あけぼの幼稚園が生まれた背後には、敗戦直後、大谷賢二牧師の心を揺さぶった二つの動機があったように思います。一つは、戦争の傷跡も生々しく焼け野原の残る大井町で着の身着のままで遊ぶ子どもたちの姿を見て、「この子どもたちを放っておくわけにはいかない」という思いに突き動かされたこと。もう一つは「あの愚かな戦争をキリスト教は止めることができなかった。二度と同じ過ちを繰り返さないために、聖書の神の愛と平和に基づく人材育成こそ、新しい日本をつくる礎となる」という強い信念です。そして箴言１：７「主を恐れることは、知識のはじめである」という御言葉があけぼの幼稚園の創立理念として示されたのでした。

一昨日、この礼拝堂で園児たちと感謝礼拝をささげた時には、この御言葉を分かち合いました。「主を恐れる」とは「怖がること」ではなく、「神さまのことを大切にすること」。それが「どんな勉強の中でも一番大切なことなのだよ」と。昔、日本は戦争をしてたくさん悲しむ人を生みだしてしまった。その時の日本は「自分たちはアジアの中で一番頭が良くて、一番力が強くて、一番お金を持っている国だ。その自分たちに従え！」と言って戦争をはじめてしまったけれど、どんなに頭が良くて、力があって、お金を持っていても、神さまを大切にする心、世界中の人を愛してくださっている神さまを忘れた頭の良さや力やお金は、人を幸せにできない。どの人のことも大切に愛してくださっている神さまにしっかりつながる時に、僕たちは世界の人たちみんなと笑顔になれる一歩を踏み出すことができるのだ、と。

今朝、ご一緒に読んだ「コヘレトの言葉」（伝道の書）も「箴言」と同じように、バビロン捕囚後にまとめられた書物と言われています。バビロン捕囚ですべてを失った人々は再び祖国の地に戻ることを許されたものの、独立国としての主権は認められず、かろうじて自分たちの文化と宗教を守ることは認められている状態であり、宗主国が次々に変わっては、大変に苦闘したようです。同じ民族の中でも争いが起こり、たくさんの人たちが命を落とす、先が見通せない暗い時代だったと言います。そのような状況の中で、コヘレトという人は、現実主義者であり、世界のありさまを醒めた目でつぶさに見た人でした。人間の命というのは「空しく、はかないもの」だ。どんなに富や権力、知恵を持ちえたとしても、人生を確かなものにすることはできない。善人も悪人も死ねば同じ。塵に返っていく。どんな偉大なことを成し遂げても、それを覚えている人はいない。この世界で人を虐げている人の暴力を止めることはできな

い死、虐げられている人は慰めを得ない。生まれた来ない方がよいくらい、この世界には虐げが満ちている…と。それは、とても悲観的なものの考え方に聞こえます。

しかし、驚くべきことにコヘレトは若者にこう語りかけていくのです。

「だからこそ、神から与えられた今を喜び、楽しめ。あなたに与えられた若さを感謝せよ。あなたのパンを水の上に投げよ。いつの日か、あなたはそれを見いだすだろう。昼も夜も、種を蒔き続けよ。どの種が芽を出すのかはわからないけれど。すべてを尋ね求めて得た結論。神を畏れ、神の戒めを守れ。これこそ、人間のすべてである」と。

人間は自分が注いだ努力に見合った結果を手にするとは限らない。頑張ったら、頑張っただけの報酬、喜び、人々の称賛を受けられるとは限らない。むしろ空しく思えることの方が多いかもしれない。だから「何をしても無駄だよ」ではなく、「だからこそ、種を蒔き続け、あなたのパンを水の上に投げなさい。造り主なる神を信じ、神の御業に委ねて行きなさい」と語るのです。現実主義者でありつつ、造り主である神への信仰の大切さをコヘレトは若者たちに熱く語りかけたのでした。

ある方の勧めで『シェスタコービッチの証言』という本を手にしました。レーニンの独裁主義下のソビエトで作曲家として名声を得た人の本です。「自分の死後に本にすること」という条件でヴォルコフという人が本にしたもので、その真偽について大論争になった本のようですが、その中でシェタコービッチが「自分は常に恐れの支配のもとにあった」と告白します。そして「自分も含め多くの人が恐れの故に不誠実な生き方をしていた」と。一人の軍人のことが語られます。彼はレーニンのもとで軍功をあげたにもかかわらず最後は抹殺されるのです。彼は音楽を愛し、オーケストラの一員としてヴァイオリンを弾くことを夢見た人でした。レーニンのもとでなければ、人を殺すことも、彼自身が殺されることもなく、穏やかに音楽を愛して生きることができたはずが、しかし「人への恐れに支配された社会」に翻弄され死んでいくのです。「人への恐れ」は人の心を歪め、神の愛から引き離します。平気でうそをつき、見た現実を見なかったことにし、最終的に多くの人を悲劇に巻き込んでいくことをまざまざと知らされます。それはかつてあの戦争に突き進んでいった日本の姿でもあるのではないでしょうか。「人への恐れ」は、私たちを造り主なる神の愛から引き離し、本来神が人間に与えてくださっている隣り人への愛を歪ませていくのです。

聖書はそのような絶望の現実に閉じ込められている私たちに向けてイエス・キリストの救いを示します。この方は「人への恐れ」に取りつかれている私たちに「造り主なる神の真実の愛」をあらわしてくださいました。「人への恐れ」に打ち勝つ「信仰の幸い」を教えてくださいました。私たちは、コヘレトと同じように先行きの見えにくい時代に生きていますが、しかしコヘレトが熱く語り、イエス・キリストがその身をもって届けてくださった神の真実の愛にしっかりとつなげられていきたいのです。